



春色傳家の花

五編

へ 13
2926
5 止



門 へ 13  
2926  
巻 5

昭和九年  
七月六日  
購求

春之傳家通名五編序

梅柳

うがしし故人の秀逸毒のなきまは柳の  
媚平松の操松もくへく来人ぞあはれ  
一冊を題名は傳家のたしむるは  
町の志園へ抄りりより板えりて書

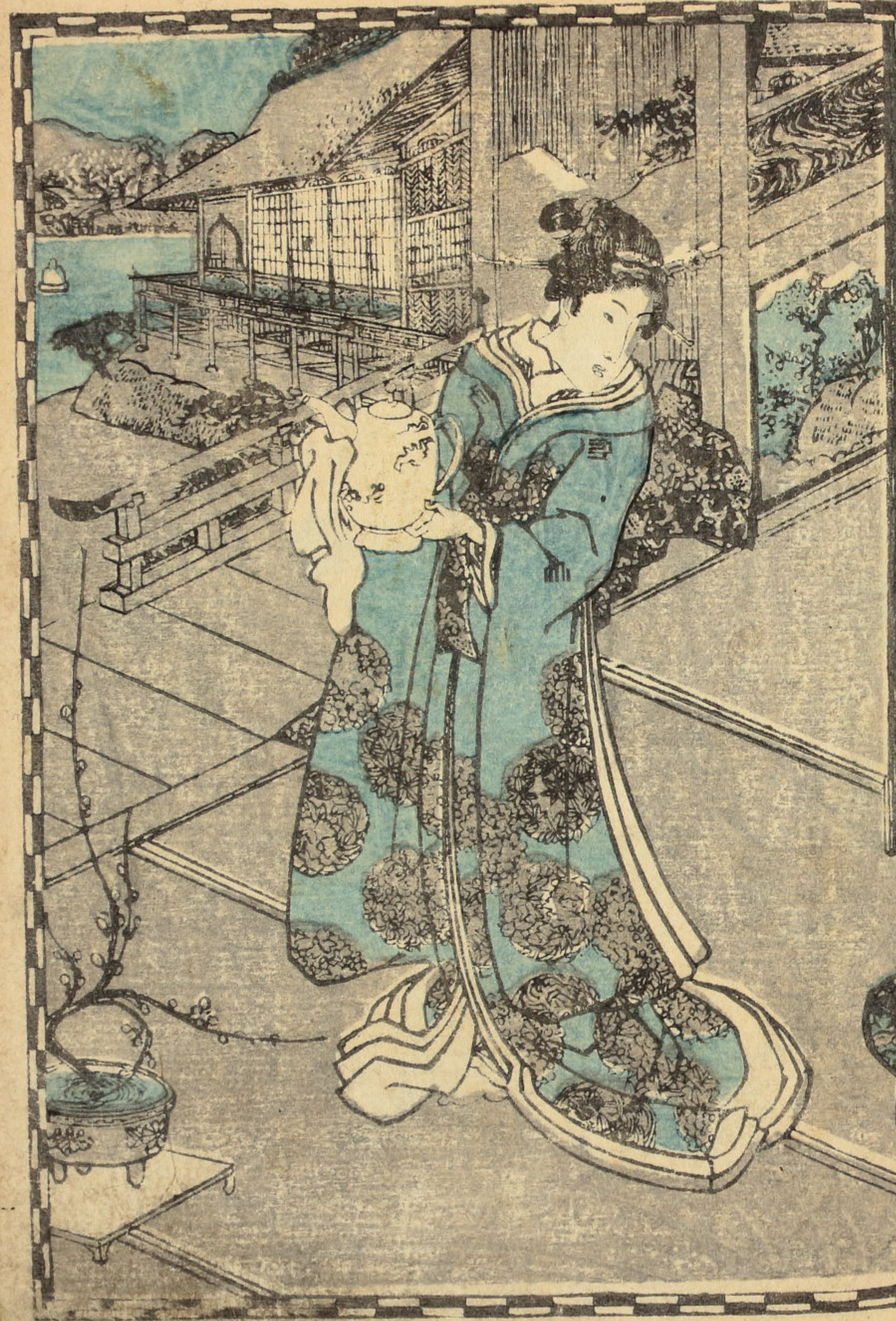
くちやなひよふ<sup>す</sup>父<sup>す</sup>の<sup>す</sup>曾<sup>す</sup>又<sup>す</sup>の<sup>す</sup>書<sup>す</sup>實<sup>す</sup>  
入<sup>あ</sup>為<sup>あ</sup>こ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>わ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>ま<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>業<sup>あ</sup>に<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>り<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>福<sup>あ</sup>を<sup>あ</sup>  
魚<sup>い</sup>海<sup>い</sup>も<sup>い</sup>仲<sup>い</sup>有<sup>い</sup>も<sup>い</sup>腹<sup>い</sup>鼓<sup>い</sup>お<sup>い</sup>下<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>つ<sup>い</sup>怪<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>も<sup>い</sup>好<sup>い</sup>く<sup>い</sup>  
今<sup>い</sup>も<sup>い</sup>五<sup>い</sup>海<sup>い</sup>と<sup>い</sup>舞<sup>い</sup>た<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>は<sup>い</sup>る<sup>い</sup>電<sup>い</sup>に<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>り<sup>い</sup>出<sup>い</sup>  
く<sup>く</sup>し<sup>く</sup>む<sup>く</sup>ひ<sup>く</sup>ひ<sup>く</sup>い<sup>く</sup>の<sup>く</sup>あ<sup>く</sup>祝<sup>く</sup>す<sup>く</sup>ま<sup>く</sup>ら<sup>く</sup>  
延<sup>えん</sup>喜<sup>ぎ</sup>よ<sup>よ</sup>一<sup>一</sup>海<sup>海</sup>に<sup>に</sup>屠<sup>屠</sup>種<sup>種</sup>様<sup>様</sup>捲<sup>捲</sup>伴<sup>伴</sup>者<sup>者</sup>が<sup>が</sup>

何<sup>な</sup>言<sup>言</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>ん<sup>ん</sup>善<sup>善</sup>悪<sup>悪</sup>ら<sup>ら</sup>者<sup>者</sup>宿<sup>宿</sup>の<sup>の</sup>目<sup>目</sup>が<sup>が</sup>空<sup>空</sup>  
く<sup>く</sup>ぬ<sup>く</sup>鏡<sup>鏡</sup>解<sup>解</sup>些<sup>些</sup>醜<sup>醜</sup>臭<sup>臭</sup>い<sup>い</sup>紙<sup>紙</sup>向<sup>向</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>あ</sup>る<sup>あ</sup>に<sup>に</sup>  
床<sup>あ</sup>へ<sup>あ</sup>は<sup>あ</sup>し<sup>あ</sup>覺<sup>覺</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>と<sup>お</sup>知<sup>知</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>こ</sup>に<sup>に</sup>知<sup>知</sup>ひ<sup>ひ</sup>

ゆきしにやふせ

柱<sup>はしら</sup>の<sup>の</sup>南<sup>なん</sup>廳<sup>てい</sup>の<sup>の</sup>梅<sup>うめ</sup>を<sup>を</sup>結<sup>むす</sup>て

為<sup>な</sup>水<sup>みづ</sup>を<sup>を</sup>水<sup>みづ</sup>誌<sup>し</sup>



有色有香  
傳家花  
貞也操也  
卷中婦也





昔せきせくトけうちふ百の懐より葉と取り出し  
 とお姫女の口へ金するともお姫の葉へ水と汲  
 ぐまがり糸かけけ水とおあさんの口へは後  
 おきせておをんかせくまぐさくらちや戸通りおせん  
 ト言ひまじくお百の味するそらふ自分の口へ  
 水と一は香甘くをりながる胸のあそりと河よめと  
 ちづり押せともお姫女の掛し肌守りながめの中よ  
 り何りともげむまをきや用さの葉りとを建くはる

ちくちく見まは日外炎香あひりく〜と記部親の  
 記念とく母の懐り〜名残は乃生所刻ふく〜  
 がお強ま〜しが例おあお姫の足もおもはるべと  
 むえりお懐にえのゆくお姫の昔へ押つみ志さまぐ  
 に介抱せ〜お人の涙乃通せ〜あやお姫女へ声  
 書ら〜お地息と吹返せ〜おあま〜お姫さん  
 ともごもがねさ〜お姫さんおあまさん〜お  
 さまとお姫女へ目と〜おあま〜おあま〜おあま〜

愛の何れとくごさめまて上（井）早川の宿裏サ（む）むまめ  
 ア私（わ）もやア何程（い）く遠（と）へ来（き）ましく上（上）アおま  
 何れ（ど）ううう流（か）きと来（き）まけ何れの舟（ふね）へお掛（か）りのと  
 糸（いと）どん糸（いと）んぞ引揚（ひきあ）ぎ貫（わ）つこのごごどふ言（い）ふ  
 浪（なみ）と海（うみ）へお遠（と）入（い）りのう知（し）らなうがけ何れへ引揚（ひきあ）ぎ  
 ううの及（およ）びむるから私（わ）がお世（せ）話を（わ）まもるううを  
 夫（お）まお持（も）つとお在（い）ヨトやさしく云（い）ひまておの娘（むすめ）の  
 ワット（い）と一（い）声（こゑ）泣（な）出（い）まをふるのうらゝ慰（なぐさ）めくアアサモウ

何れ（な）も泣（な）まのなう子（こ）まへとらうと流（ぬ）らさうけ何れ（この）で  
 糸（いと）も糸（いと）をい糸（いと）んを（ち）はるをわう何れの宿（しゆく）をい  
 とお是（これ）を是（これ）よりふるの自分の足（あし）踏（ふ）の足（あし）物（もの）をい  
 着（き）たさむむと出（い）る程（ほど）お私（わ）と何れの舟（ふね）へ来（き）まの裏（うら）乃  
 杖（つゑ）へあぐ糸（いと）アおるさん（その）と連（つ）れお持（も）ん  
 をせし流（ぬ）き物の私（わ）が流（ぬ）き持（も）つて揚（あ）げやせう  
 アおまう着（き）たのう私（わ）もやア吾（わ）中で送（お）れまて来（き）ま  
 をうごよ。サア娘（むすめ）さん私（わ）もよと引（ひ）きまお揚（あ）げま



とも歩のまをいゆうあ〜  
 舞うても好ヨいませ〜  
 心持が使くありませ〜  
 森どん私をアけ娘さんと連く  
 声とけくけく〜おあはれおと  
 垣指へをう〜お是ヨト言ひ  
 小恥うり揚り那須元へゆり  
 の家おひと〜と奥女の小恥  
 目とてまりさぐ〜手箱を灯〜  
 さんおゆりり丈そ〜お是ヨ  
 連がわりの久〜ア〜途申〜  
 う〜今杖のけ方へ止るるの  
 神へ火とお〜おとせお  
 らく〜異るト〜い〜け〜  
 向へお送らん〜おのあはれ  
 意をあるお〜おはれ〜

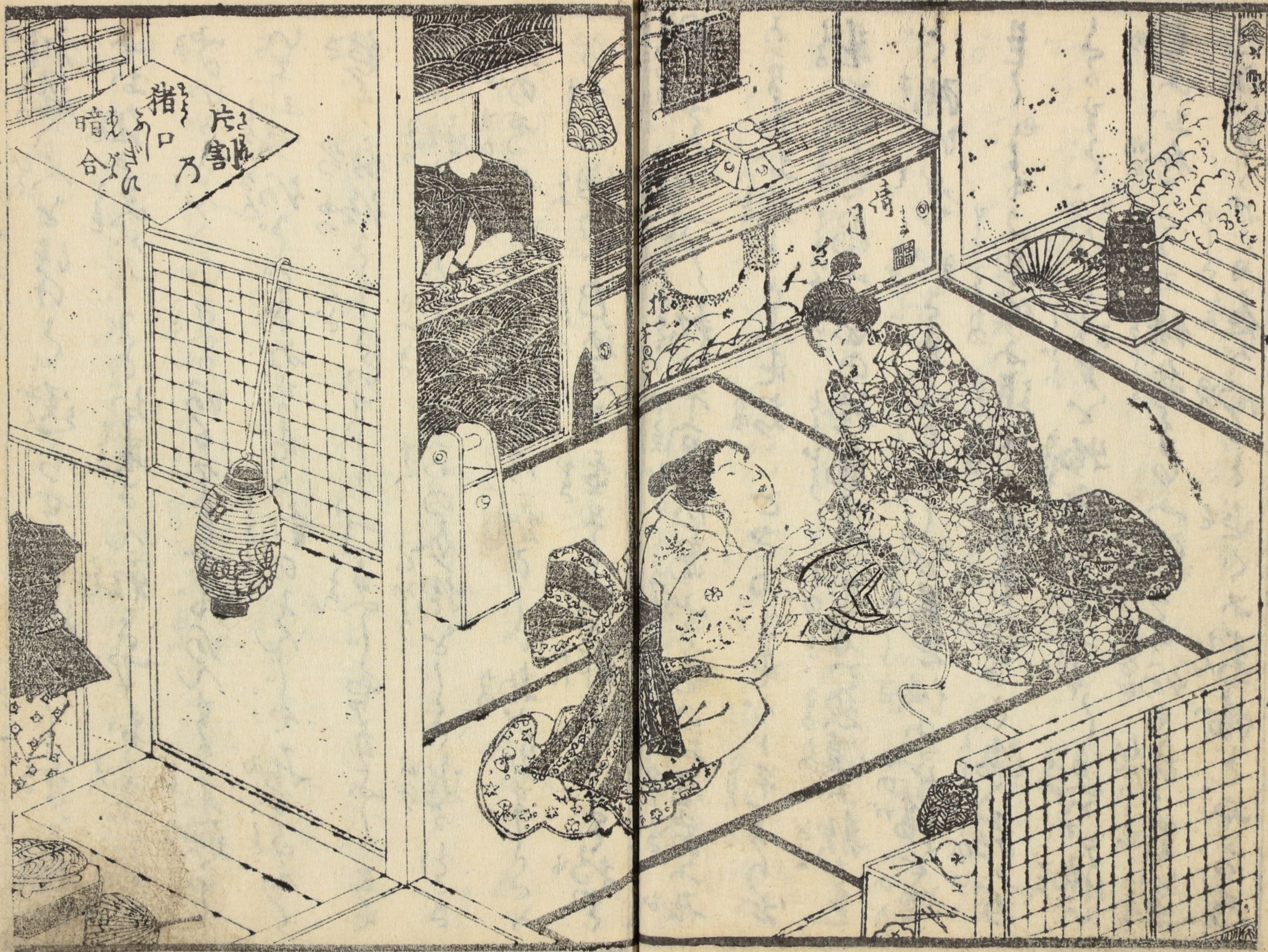
目とてまりさぐ〜手箱を灯〜  
 さんおゆりり丈そ〜お是ヨ  
 連がわりの久〜ア〜途申〜  
 う〜今杖のけ方へ止るるの  
 神へ火とお〜おとせお  
 らく〜異るト〜い〜け〜  
 向へお送らん〜おのあはれ  
 意をあるお〜おはれ〜

おはれの巻 上

三

るヨシひまわりらへへお世せ話わさるふありまへへお年の光ひかり  
 ぶごごおまはてふ上うへはうら二個ふたごの肉にくへ送りおくりる物もの  
 ちきども娘むすめのくさへへおまはてふまへへお世せ話わ  
 あつゝアア娘むすめ子さん先まへ刻ときの夏なつに取とり給たまはせては  
 みんごが子こおおのママともへおまはてふへお送りおくりのごら  
 能よ合あを教しへておまはてふへおまはてふの力ちからに及およびあひるあら  
 人と親このんごでもおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 へおまはてふと親この母はへおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 おまはてふの娘むすめはへおまはてふへおまはてふの娘むすめは

思おも入ひりへへおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 りおまはてふと親この母はへおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 其そのの今いま昔むかしの山やま家の隆たか勢せううらへおまはてふの娘むすめは  
 と親この母はへおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 見みへおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 へおまはてふへおまはてふの娘むすめは  
 目めよお会あひごらへおまはてふの娘むすめは  
 でなうへへおまはてふへおまはてふの娘むすめは



猪口乃割  
暗合

猪口乃割  
暗合

五

別荘へ人とほけく送らせく進もうと手と探せ  
 小おなまのせうとおまさん私さやおあふちと  
 ずいそんていまがゆるるまどもあんなのお嫁  
 い子エーゆごごおませり私のもんごそあつら  
 終る終るトさまー下まじやあかーま  
 が子私さやア先おあのお抱とー進る  
 私のもう申うう終りの時刻らーあがま  
 らえの通りふ色返んどあまーたが那らまーあ  
 おなまののーヤ終るでござおまー

私のお葬さんの記念ごとかーお母さん  
 私ふ呉すーのぞござおまーヤあまーあ  
 のもお葬さんのーハイ記念ごとかーおま  
 おまートッウそー又まの物ぞあひあま  
 何うまの久もーハイは終るお終る終る  
 終る終るがござおまート見よりあまの  
 長物とそーめあ

おまのの

て

何處なほこのおまが養親やうしんと云ふ大阪おさかの永町ながまちの町人  
 あり養徳やうとくを判七はんしちと云ふが辨判七せんせんしちと云ふ者なりし  
 がぬと考しるの内乃養子やうこ小指こさしと云ふ小判せうばん深ふかて  
 うちにおるおるといふきく出来でき一いつふおとん倉くら  
 せはかしくと何なににせんと思おもふは細丹こげにと  
 考かん取との仕柄しげを判七はんしちが丹に是おなる大倉おほくらの引  
 負おわりいと言いひをらまむ判七はんしちも小指こさしがる  
 ありがきしんをいひいはても何なにもをを伏ふせむ

養徳やうとくと云ふ判七はんしちの通とり  
 何處なほところも細丹こげに乃存のぞんらちの由よしなるま  
 し考かん七しちの考かん念ねん入り下くだり一いつ株くわを  
 小指こさしふもけいしと云いはす何なににも養念やうねんふと考かんと  
 判七はんしち二三年にさんねんの考かん入り何なにに述べん其その考かんの考かん念ねんと  
 も思おもふを養徳やうとくと二ふたツに判七はんしち判七はんしちを小指こさしに考かん  
 判七はんしち判七はんしちが考かん念ねんと考かん念ねんへ一いつ七しち下くだり  
養徳判七の考念の考念一七下り

何處の事か

海町にて海永屋を築きあつたりし大町人の家に  
て代母なるは後述としていふに猶もあつたり  
ありてはとてお花といひて年十七女にて若親由  
又醜くも七才の僅くも女ふと云ふ事と云ひ申しと  
いひたるが病ちあつたが事いふ事海永屋と云ふ事  
あつても彼是のふ醜くもいふ事と云ひ申し  
ありてはとて一日も速く死にたつと云ひ申し  
此の事を知りては海永屋が死にたつと云ひ申し

家督と傳り富以申の成人の後別家させんと  
おのいれしにけ程に代母なるに後述としていふ  
人扱もよく扱ふ事申すは極子と云ひ申し  
或とも判七の智に及ぶ事と云ひ申しとお説ふ事  
いふ判七のふのうらふ思ふ事と云ひ申し  
いふ判七のふのうらふ思ふ事と云ひ申し  
て女房と持て入人扱ふ事と云ひ申し  
此の事を知りては海永屋が死にたつと云ひ申し

5

九

作樂の舞

七

とも仔細の何れも〜終ふ福永の智とも  
 りお花と主婦に在り〜つる名あつたあ場の  
 別荘に隠れしと名と楽跡と改めり憶と一  
 帰るをうちにお花の腹に女の子出来と生  
 せし別ちお花より是より後判七の小腹の更  
 とお花にゆいゆい〜思ふらんと思ふども何とや  
 こそ魚や〜日ごと〜い進きて又二年程た  
 りら小判七の尻のん地〜と〜孫〜りしが次  
 ぐ〜い重くありて〜お〜か〜あり〜小判七の

お花と枕にゆいゆい〜近づくに海のみかどと云連せ  
 後小判七を〜物作りお身お花〜が  
 ゆい〜思ふ〜中を更も〜ゆい〜お花  
 がお花と〜お花〜お花〜お花〜お花  
 お花が成長の法は〜お花の所割と〜お花  
 とも〜お花の名を〜お花〜お花〜お花  
 終ふ果敢なくあり〜お花〜お花〜お花

作樂の舞

七

らむ時七女ありるに命と家督とて  
支配人小後見とさせ申すおまを連て高  
場の別荘へ移り又小森小附添ふる最  
初ふはくつ小後が方へも幕脚とまて呼び迎  
へんと為さりしおまの時ちや小後親子が物乃  
内の年時と記念へ下りし跡をまが致せん  
まおりふる ○彼おまがおまと言ひし  
三娘をおへらまし高場の由新造と申し  
お花がまありと知るべし

第廿六回

お百のおまが長禪りを洗くぐとおまは涙ふく  
る長くわしが徳小掛たるおまより記念の結の  
行割をおまのおへる出く下おまさん此結のと  
見とおらんかりの言のまとおまの不審をうふ  
海の結の行割とよくくえん物りしと  
おまより記念の結のとまら出くまはと結

おまの結の行割

二





お子い出縁とやらでござぬおせうお入と互いふは  
長物係りに姑く時のうらあせお歌の巻あより  
申仕切の孫子と細月ふゆと一夫婿さんお呼ぶ  
海んごらお粥が出味と指さうと進指久一  
忘さく指さく出味と指さく来てお呉。サアお  
妻さんお粥と一は喰うおおもおあ外ごらうら  
お吉森呼とお松子エト是うお妻お粥とあめ  
そのよゆお近とてはまご外房お体とたり

周おふふ響お生おお妻お似とらうとて  
おおふんとあせし夏初編おんごらうと  
お妻の後の足とど悦増お妻の容貌のよく  
似たるも又な理あうとや  
遠くそあもいつうゆと日も稍さくさしおせう  
己と初あうくありし廿一この靴男おあが家の  
つのおとトト紋さながら一ツちくお歌嬢く  
まご起おくのうらあせおおとお初とぞお森も大概

お妻の足と上

一三

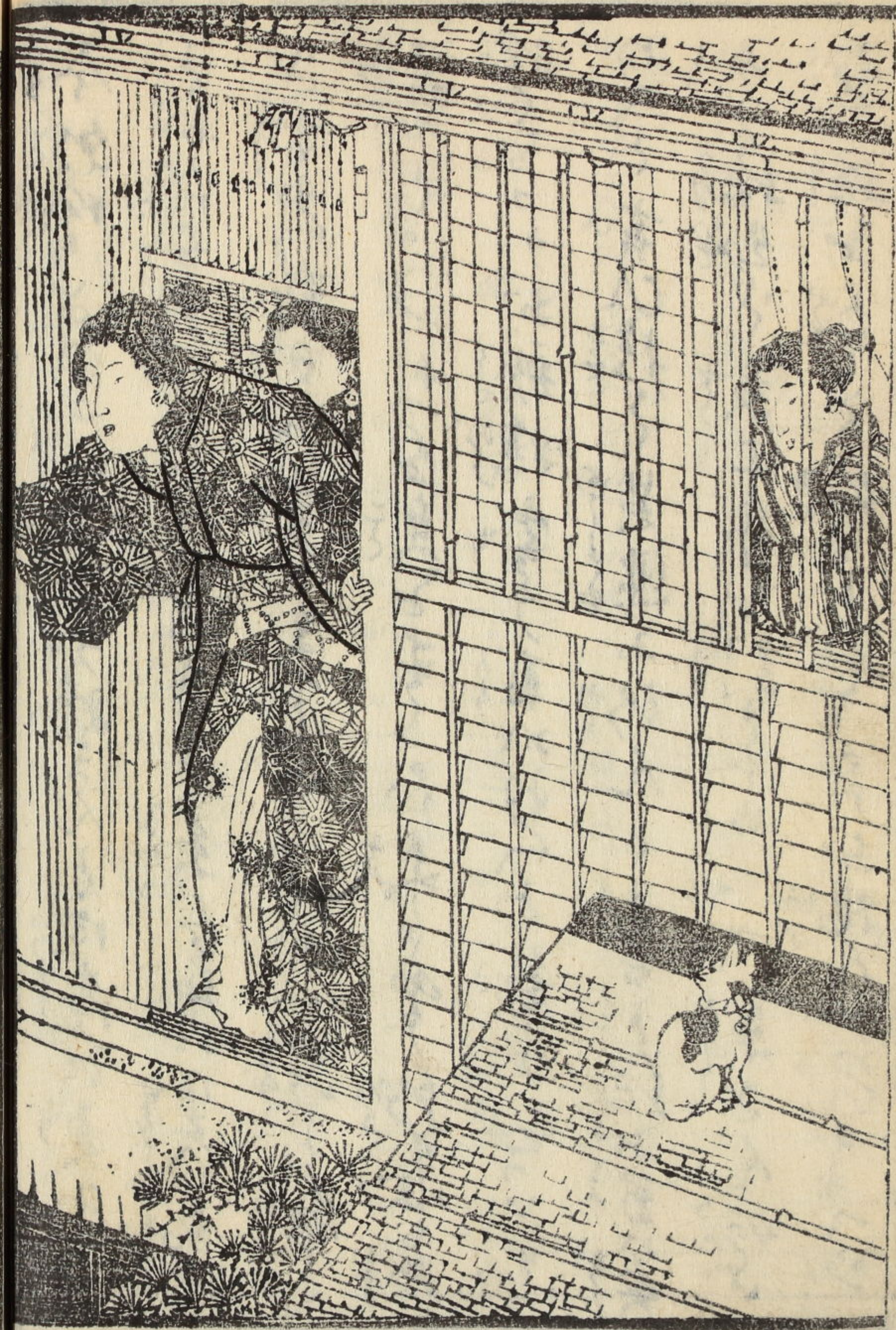
程のつゝものゝアト喜りて小歌の森名の程  
あゝ内より掛紙とまづ〜声とぬるがら〜下ヤ  
系さんうエ大をうあくおはなまの〜エ〜  
多のの〜やアわ〜る方が運りの〜アけ身ア  
今朝一用見し〜て来この〜せまの〜らと小百と速  
く起〜く号子空と急に吐〜がわらう〜下ヤ然  
ぐでさおまも〜く私のあ〜か時秋お客がわらう  
方小瀬と森この〜どわらまも〜ヨ〜下ヤ〜て〜

今朝ゆ〜このう〜下ヤ〜と〜  
とお在なさい〜せと〜云り〜と〜系を〜仲い〜し〜の〜氣連  
ま〜野の〜猪〜まに〜ま〜と〜ま〜い〜ん〜ま〜下ヤ〜  
あ〜と〜。〜おつら〜ま〜と〜ま〜る〜を〜ま〜い〜や〜  
程〜ご〜ころ〜お〜歌〜嬢〜を〜う〜用い〜ぬ〜く〜と〜替〜う〜を〜と〜去  
わ〜く〜喜〜ひ〜様〜と〜是〜邊〜ふ〜ゆ〜ん〜と〜ま〜る〜と〜た〜ふ〜百〜の〜東  
う〜う〜強〜し〜と〜系〜三〜命〜と〜引〜と〜が〜め〜下ヤ〜系〜さん〜ゆ〜が  
也〜後〜と〜ま〜る〜ゆ〜ら〜し〜て〜サ〜マ〜ア〜お〜揚〜ん〜が〜ゆ〜の〜ヨ〜系〜へ〜の



あまのついで

あまのついで  
の  
ついで  
の  
ついで



あまのついで

あまのついで

揚きもよく出ぬおまのこのおねふあつちあつ  
かゝる毒ごうらむくはゆうやせう「あ〜」困るね  
おあんなも大概に急推ごまも難がらしいあつ  
揚つてお害の難と有返えんとお呉るまのヨ、  
おの情男の難とえん〜おが面白いのういか  
城の人おも知さうせらるがらややひける難〜  
喜ひをぐ〜推切つて淫うとまると少力の敵は  
ハ、ヤ、ヤ人のまゝまもせまごねまとも揚る

のが者あら遠あへび出〜てお同ふ想うらうは  
つ〜お呉るまの〜言ひうけと妻と見送り「お呉る  
有返えん」と出〜とお呉る言ひをてお呉るの  
や〜知らぬどのゆいもり出〜て系三郎と難見合せ「  
系さんごごおまの子〜お呉さんうい〜おあ  
まごは夜つらう今ねまごんをお呉と推ごう  
せおへ〜ま〜や〜害と言つ〜このけ嬢のま〜  
まごうら揚つてお呉るまの〜と喜つ〜この〜

何の度か 唾方なそんりう 結うと 迷く言ひたり  
 のふ 全体お歌娘の言ひ拾うて 迷のやうな下  
 があんまり 迷い子そんりう 何程でも けりお前  
 さんいばお妻さんと 知つてお在の久し 知らな  
 らずいば 娘いば 身の外のお墨が 縁付けて 拾う先  
 の娘いば 子トヤまじゆ 丁度好うと 子エマアいり  
 世一が 何ううう お揚んをまよい け身は 遠嫁が 拾  
 見ると 程のこし 世さあやアあうねい 妻が 何と云  
 ひういあく 肉へ 送入 妻が お妻いば 身の外の花 拾う  
 いいより 不思議 お百子こまけら 名を 若く  
 見ると 娘婿の 何の 世のこし 何れも 妻 誰うい  
 何れも 妻いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば

何の度か 唾方なそんりう 結うと 迷く言ひたり  
 のふ 全体お歌娘の言ひ拾うて 迷のやうな下  
 があんまり 迷い子そんりう 何程でも けりお前  
 さんいばお妻さんと 知つてお在の久し 知らな  
 らずいば 娘いば 身の外のお墨が 縁付けて 拾う先  
 の娘いば 子トヤまじゆ 丁度好うと 子エマアいり  
 世一が 何ううう お揚んをまよい け身は 遠嫁が 拾  
 見ると 程のこし 世さあやアあうねい 妻が 何と云  
 ひういあく 肉へ 送入 妻が お妻いば 身の外の花 拾う  
 いいより 不思議 お百子こまけら 名を 若く  
 見ると 娘婿の 何の 世のこし 何れも 妻 誰うい  
 何れも 妻いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば  
 何れのお娘いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば 夫いば

十一

お前の御志が私に代つての世にござう物なれ  
私に代つて清さんと申さうと申す物なれ  
清さんが解らぬ私に代つての世にござう物  
私のお志さんの御志も私に代つての世にござう  
と申さうお志さんに代つての世にござう物  
お志さんの御志も私に代つての世にござう物  
私に代つての世にござう物  
私に代つての世にござう物  
私に代つての世にござう物

お前の御志が私に代つての世にござう物なれ

お前の御志が私に代つての世にござう物なれ

十八

とふ万ふ知らせとお春さんの夏をよお秋をよ  
と今いほおとふと思候とお春さんお合  
むりりうの吐くをうへお春さんと若う  
のめらんちお船の亭主乃お為小遣へお  
と二女うち候と只果してぞ長うりり

春色傳家の花巻之十三了

春色傳家乃花巻之十四

江戸 為永春水著

第廿七回

湯揚屋の奥女活衣乃他ありみあげの  
拭うううと湯場の入口へ作山を声あて  
お合さん私があつた湯船乃水船へ  
金銀とち知りでないうーと知らさい  
たのうへーとち知りいけならぬと  
お合さん



あまいう子エト言ふとさ 初ふ森婿んでかど又て其  
ころ 娼妓 x アー少 私の云尾も指をいふ アーお  
おのも改者さんのももんを浮て指ののれ私のむら  
指をいふ アー 見て指さるれどもどまーしとせも  
又いふいふ手になるヨ ねまやア今日老さんの返  
奥のあいつとまよけ返らうとかりふハ 言ふとさ 十二の  
小女が氷取の拵投の中へ 重宝と入る拵入りへ  
秋次さんおあまんの合衆が浮こりてせくつて来は

とヨ アー 慈うう婿しいウ アサけ婿ハ せんをわさ  
お物へ入ると鼻と突くと死ぬりあせ しくを指に  
あま 氷とこぼしなぐりあると又お物やとやまーい  
ヨ 少が氷取へ 入ると 遊々のとさ 来うと  
さも婿しとりに宛あし 舞いながら 拵投と指さ  
指がしとせく アー 那婿も形容むうり大さく  
まつとやらちり赤子さんど アー 何事でも苦言が  
あつらうと思ふやうどヨ。ホニ 苦言とまへば 志者さん

竹家の巻五ノ下

何ん  
何んぞう大それた苦勞をせらるる何んぞう七はけぢり  
のあまてがらひやうごまアア今も何んぞう彼嬢の  
お母アが来て吐しをたて居させメ下何んぞうとん  
かみきと探んどらうけきまのやうにお客と  
しておあそびと清らふといふ苦勞の入りぞと居させ  
よと頼めばとてよきものぞがアア然らば  
ゆいりわくサけきまアア隠して居るものと  
女中衆の吐しでゆあが居るとんのもアアアヤ  
でも居るとん那嬢が何んぞうとんも何んぞう  
わくアアとてと探んどア子孫那嬢がま  
指す時分に居るとん何んぞうとん三柱とおつとん  
にさつとてと探んどと探んどと探んどと探んと  
うあアアと探んどと探んどと探んどと探んど  
か一のいぞ何んぞうと探んどと探んどと探んど  
あ人の何んぞうと探んどと探んどと探んど  
と探んどと探んどと探んどと探んどと探んど

でも居るとん那嬢が何んぞうとんも何んぞう  
わくアアとてと探んどア子孫那嬢がま  
指す時分に居るとん何んぞうとん三柱とおつとん  
にさつとてと探んどと探んどと探んどと探んと  
うあアアと探んどと探んどと探んどと探んど  
か一のいぞ何んぞうと探んどと探んどと探んど  
あ人の何んぞうと探んどと探んどと探んど  
と探んどと探んどと探んどと探んどと探んど

あ人の何んぞうと探んどと探んどと探んど

碓氷つづまの山やまと喜よろこぶが富とみさんお玉たま平ひらが惚ほつと惚ほる  
 つとどアか下くだある程ほど那な嬢ぢやうの何なにも一いち番ばんを余あま性じやうぶく  
 そんな次つぎに平ひら平ひら人ひと一いち倍ばい年ねんう惚ほるさううおお玉たま那な  
 嬢ぢやうの母ははアと見みるまはつあううブイ、早はや知しるをいッブブん  
 かお好このむる女をんなぶらうあう二十にじゅう四よわごとまふるさどが子こ  
 眉まゆ毛げの泣なが喜よろこうくうう多おほく見みると二十にじゅう二にとらと思おもふ  
 極ごくさう何なにでもはるまでま着きる乃な奥おく山さんに島しま田た船ふねぶ  
 茶ちや店てんとせして極ごくさう言いえ判はん判はんサあさうう何なに極ごく  
 見みても玉たま平ひらの母ははアう思おもひをいッ、何なに世よのそあ  
 折おりしも女をんな申まをん頭がしらのお玉たまといふ女をんな奇あま場ばのいううア  
 表おもてさん表おもてニ遊あそぶはがぬりまううお遊あそびと喜よろこぶ  
 極ごくくまう惚ほるゆ  
 「お玉たまさうう入いれて深ふか川がわへ懸か子こにあり惚ほれう  
 辰たつみのお方かたろ出でたんおゆつてつな二にえ茶ちや店てん  
 志しらうもまういふらせぬしおもてあてあいの  
 身みもつ世よの中ちゆうでぶらうこのたつて極ごくうが目めよ

碓氷の山  
 喜ぶが富さん

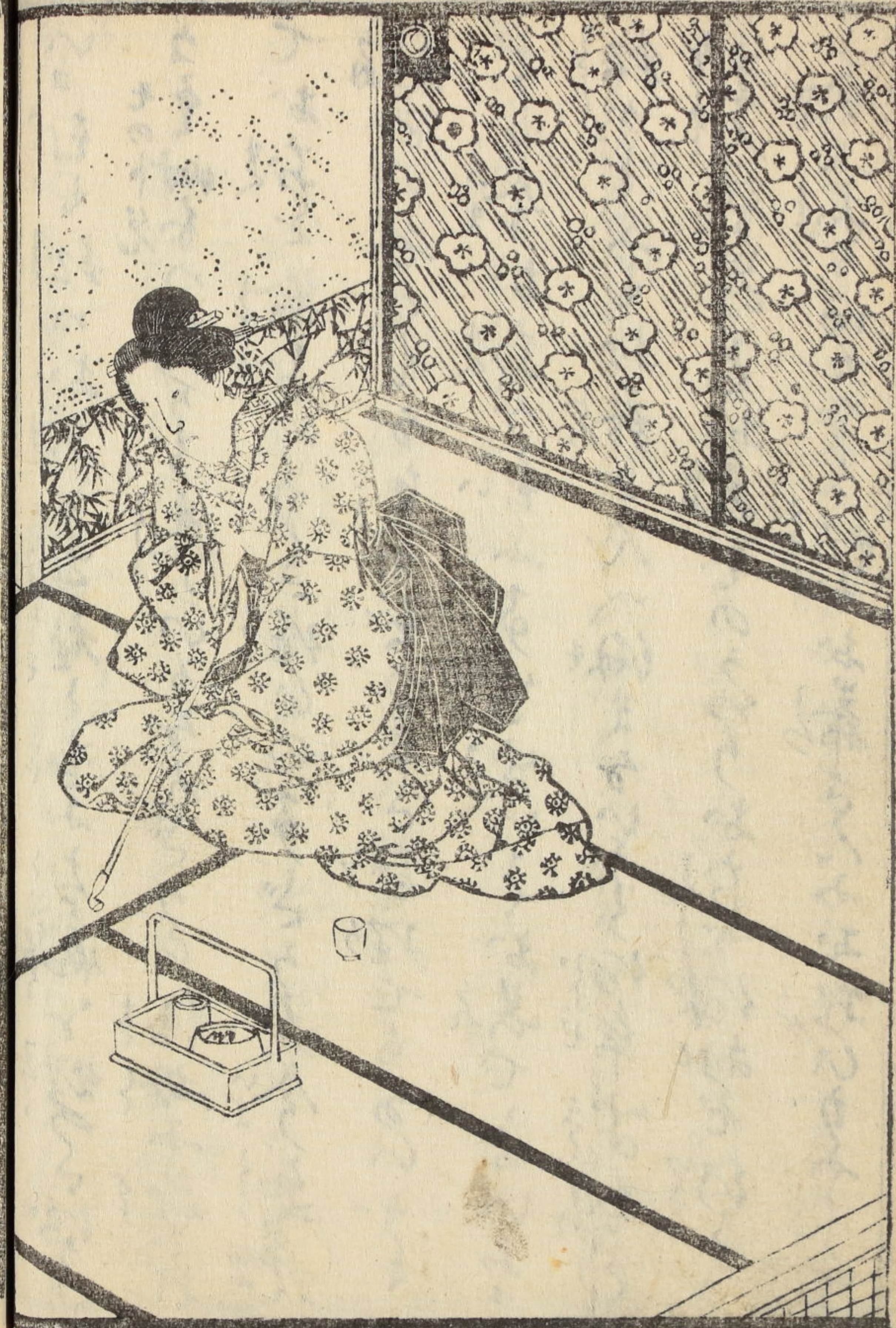
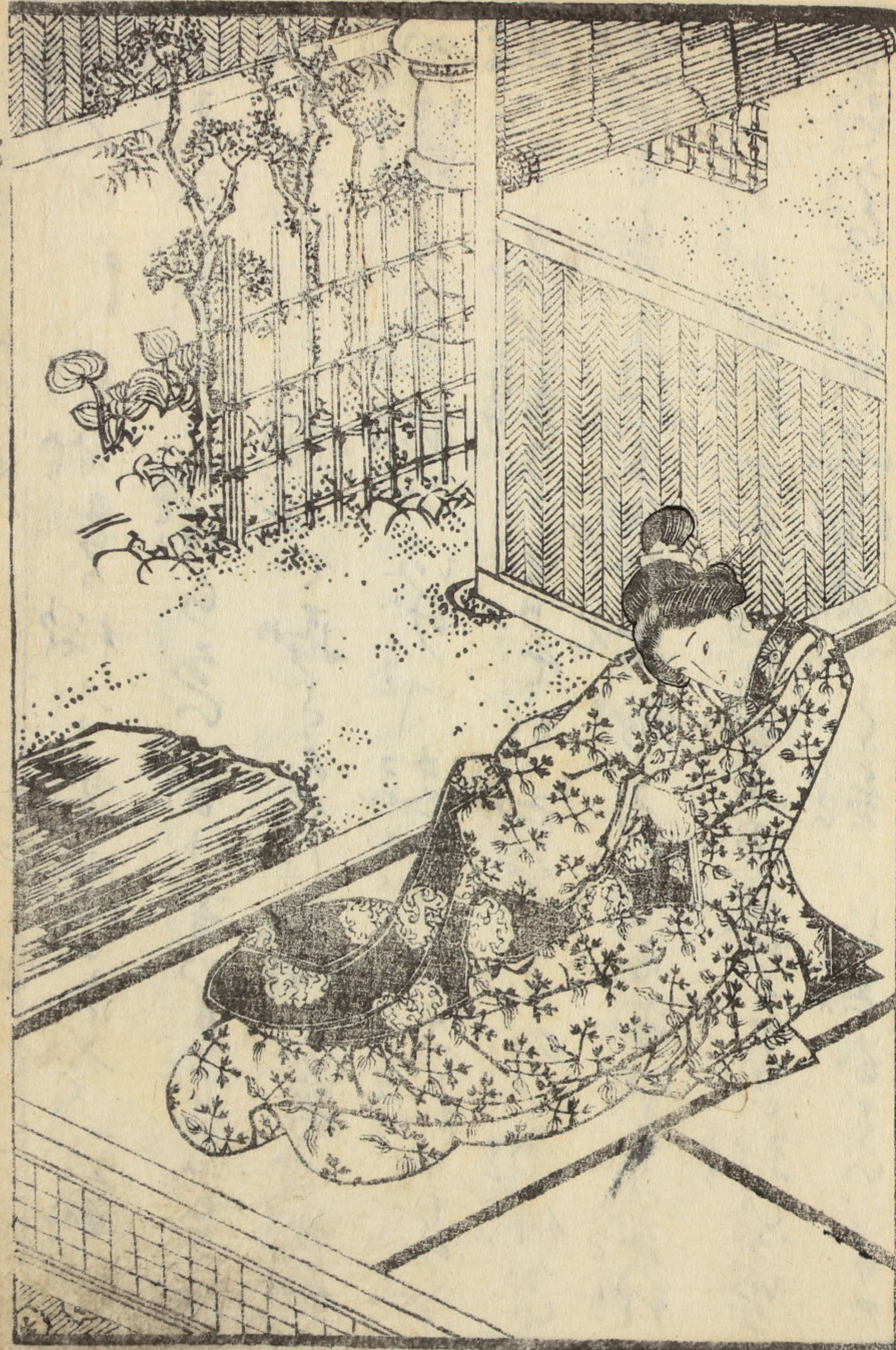
碓氷の山  
 喜ぶが富さん

しつこくより涙子のよきそちをばよき  
あゝよのちをばよきしつこくより下略  
ト下はあふて十四日の秋枝下地が涙子うに津瑞  
瑞と流つて飛る身を隣りの小庭あはれの玉衣と  
そ母のお業が何れも七とせるともぐらうと  
声「おあやおあのお娘を世の法いおのち  
さんう那澄までには流にしてきらうと  
おごとお喜いのひねもれおのちのちを

いもむも私のおおと出と素ふちを  
そのお兄うを時おのねうう年ういうなんごうら  
ておおと捨子にしつこくのもごうら今更親  
私としてこんを真がそつと義理でもあひら  
ども今おあかそふとをいそお是でないや  
私がおももおおさんへ涙まをいううの年時  
素人にあつそお是そつらうおあが何おぞ  
と思おがあらあ私がお是さんおおひりや

おあかのおはらあ

こ



その人の正へ御付する様ホして進るうう。ヨ。ヨ。おむ。  
 泣くむうりおて入解らあハナト言ひもてもおれ  
 苦へさくさく俯向て長こりーが枯くわつておれ  
 泣腫したる顔と何げ下ま程まぜお私の笑と  
 思つて意とちと云つてお長あまののど勿体ない  
 までも言とはどんをお思知らまでも言ひもてお程  
 でのありませんお長どもまふもまのほのほひが  
 おまらひ舞はは舞女どまはまはま。一サア

おうまうまうお長おれいぬとお思ひごらうら  
 お長ども思はしてお長あまの。又も  
 せむしどもお私あつさのなりまが知をさい。ま  
 とものお素人おつあまお長がつまのうらわら  
 舞女ど浮身を勧めが為て長はうとまの久下  
 イ。エ。おんを舞は望しおありません。おそんあ  
 お家の舞おへおれお長あまのうらまはつと  
 おが官ささるうおおどろお長は舞を舞はははは

孫付といふでいふか〜けと地さく難もろく何指でも  
 おおの好にあるのを言ごとく云つて又ると嫁をた  
 初めが病といとほり思つてもあつたおあがれむりの  
 子も〜水菜屋女乃娘の娘女として扱ても恥ぢし  
 いまのさいもどもおあおさんへおあをふ島山  
 さぬの内家老で孫の入のおあの子のおあが孫  
 橋の娘女ごとく言つてハ骨一おあおさんの由身かおあ  
 七海をい候ごり〜何と云つてもおあがけまを

吾れと云い切まが可憐そらあぢう親子の孫と切  
 ら孫が〜あ〜いと云は〜とヨ一五、またや一親子の  
 孫も〜人〜サアまごうら孫と孫のござ一子おあが  
 第一孫〜を〜孫ふあ〜とお見私もは孫おあおさん  
 子お目に孫〜る〜が〜あ〜あ〜やうにあるヨ。あ〜マア  
 思つてもおあを十七年ぶりで親子三人が不思孫よ  
 回會〜の〜実ふ休れのお引合せうとおりのお  
 おあのお〜らたむ〜る〜を親と持な〜

おあのお〜らたむ〜る〜を親と持な〜

親子の名をのり  
久と言のまゝくおむの今更ふ意然る言法とまゝく  
つひ母のふも痛くく深き悲あるあ親お苦  
とさまるの不意ぞと般より思ひ知りなり親の  
云法に法がふてふ深くも思ひそめさうり男おま  
ある後道かへ鬼やせん南やと種ふんをま  
つひに若しむるこそ是れおもな  
此れは春と纏るとと成人倫に何れと種が

いとくまきにお茶が云法とまゝに名法  
そのまゝで嫁と男が何れまゝお父さんお  
いま一法にせくまゝと上もささ結構  
お法とまゝの者や入せは後女にまゝ  
まゝまゝ一と何れまゝすいてもおむが  
親令いりある親ひても奥女が  
もので何れと何れまゝ一と春水  
〜〜〜

はなはな



社込場河又後比場も河のまきバ娘の社込  
むろと着く後比場と云ぬうち比喜  
か一速う〜や是う次を歩見トれ自然  
とおまぐん中とある程行くと合念の必  
まのるま河うん着安もま〜けま〜見ま  
と後とあふるといふ

第廿八回

義に強金留り岳八幡の社内以伊毛登と書へ  
酒席河河小由歩河小由合よく村以料理  
珍くと書安と云ま危丁に日毎小密の強るかく  
最強り〜その中に今日〜み強丁の強  
屋乃強〜かの富以強が強を〜客の強ら  
武家〜和舌中〜の強の〜ら〜客強  
ちいと十人〜り〜の例の〜小強和十  
新強〜と〜酒席の名人と〜強  
客の強〜の面白〜と細や〜の強と〜

右の強〜

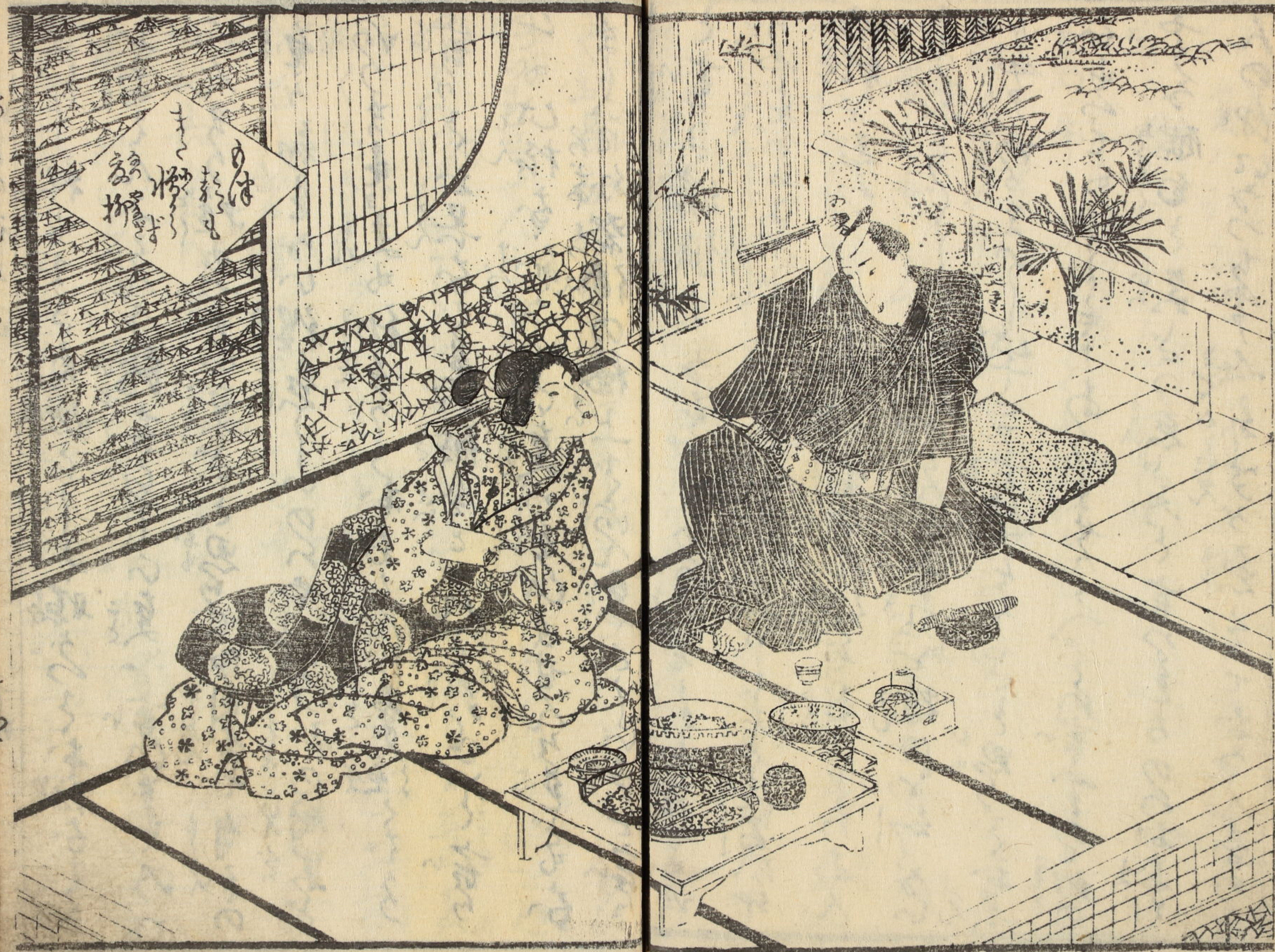


早くお呉るもるやうふし〜おえなま  
 らん〜もるちがひのあやうにまら  
 づ〜いひや〜まよりのまごあ〜ゆ〜な  
 漬あつ〜茶を人のあまを速く懐く金  
 ぐ〜下は産が持つ〜あ〜このまへの産  
 いんがおあもん小肉冷〜卒産進〜てあ  
 お返すとすい〜呉ろとまひま〜ヨ〜ヨ〜く  
 ト〜ア活判おけ方〜お返すとまら〜

云〜お呉るせ〜言ひあ〜究る  
 一茶をまさんお〜と見〜大遠〜け  
 産産のな次〜あ〜ま〜が利〜子〜私  
 や〜知〜て〜病〜ま〜ん〜ヨ〜ん〜ま〜浮〜情〜を〜お〜あ〜ま〜ら〜と〜お  
 内〜養〜さん〜が〜窮〜へ〜指〜三〜本〜ご〜ヨ〜と〜い〜ま〜と〜ま〜ら〜と〜ま〜ら〜と〜ま〜ら〜と  
 活〜判〜紙〜戸〜と〜ゆ〜く〜知〜し〜指〜け〜ふ〜和〜十〜一〜不〜養〜者〜見〜付  
 と〜ま〜一〜玉〜物〜り〜ま〜ら〜ア〜女〜一〜ア〜レ〜モ〜ウ〜名〜字〜を〜和〜十〜さ〜ん〜と〜ヨ  
 和〜一〜ホ〜イ〜見〜は〜名〜調〜法〜と〜り〜ま〜ら〜と〜ま〜ら〜と〜ま〜ら〜と〜ま〜ら〜と〜ま〜ら〜と

○ 愛ハ何知と知く後にも最替りある小座ぬふ  
 寄と唄女のさし向の何を嫉しと急申う他月お知  
 せぬ一采しと急美しとぞ思のる色 書寫さん一言  
 うけと完ふ笑ひ唇をくと然口をちよいと洗しと一  
 おぢどくもむとの吃つとくお呉子の紅き中やいろ結  
 てもおおもんが来てお呉子をらりるりくむとや春ん  
 ぞと大そく研すしとくあ 川しと大分い由様姑ごま  
 先刻来を夫お是把きといくら遠知まで来く是ら

と急く情をいしとまづこの何ぞ急お用でもの  
 りや花のさすト急りきと急なる怒りしと急には急  
 乃新と急らりと急中り下急さん何ぞ用くそのあん  
 まり急らりと急いしと急おがえんお急と極の急知かい  
 と急り急るまじと急くア急構と急く急思つと急  
 お急りてお急らと急ア急りませんと急い急お急の  
 やう急急急と急い急急急急急急急急急急急急急急急  
 んの急急急急急急急急急急急急急急急急急急急急急



おのれの

おのれ  
おのれ  
おのれ

おのれの

せいし 私もまゝの自惚らしく嬉ぶるおはなさん  
 おおさんふらんを驚きらしくいと喜ぶと云ひませぬ  
 向んまう控めつよい喜ぶと思つても自方でお前の  
 身が知れぬ程急いでのんやつかり私の因果ど  
 向うままよまゆ初もうしくおおさんが喜ばくたう  
 喜ぶお是をまよむが能合こがれと死むべと喜ぶ  
 てめは根を断つていと喜ばせんとせむもあ  
 まじい日外祭禊の橋上どくんとあやさしりゆと喜ぶ

くお是あまづさおけま縁が結つてとよまおひ  
 切らませせんと言ひつ勝へたらしくとほま涙とぬ  
 理とん思ひなうとも男もふ思と我理ととあへて  
 細く返すもあうぐしく思へん故を強自と云  
 活あつる程おあがひる申うく物くほ切ふ言  
 てお是方さるまの喜ばせたりも新く物く  
 喜ぶ私の身にあつちやア嬉しく世の中の  
 表理せんけりやア飯合おあはれ喜ぶふらひなま

このごも私の方くう命づく心も情女おまつと世へ  
 ねへ中へあふいと言いついおぼやもごも知れぬ  
 先づら老も南もおおとみ十清さぬお由様さんと  
 さいちやうごふも死んでもを捨ちまゐりおせやせん  
 まごもはるおおの橋とくおふくくんが解合を  
 おあはれ情合にあらふと為さうとさぬお十清さぬがお  
 出さすつと親子の老若さをかかこのごもおおも替へ  
 紙づつらば私もおおへくおおはれおはれおはれおはれ  
 何卒然ういふ涙ごりく先い弱と思つとおはれお

せんお不之私さやアお十清の娘にやうおせんかたなり  
 娘女のおおとごお一そのやア又おお子お私がお十清の  
 娘とておおおんが義理とまゝ情合にまつと  
 おはれおはれおはれおはれおはれおはれおはれおはれ  
 とらへ甲斐がさいむらりりお高川中の笑ひ色のふ  
 ろつと涙の影いも叶はないうら寧ろお親子の娘の  
 切是てもつ甲斐女おまつと為さうとおおおまんも

おはなごのあはれ

十一





せんぞ一夫一婦の女と止めと素人ふされがしの  
軽いと叶へくお異かたるうる一どもも夫がうらひ  
お対くく一ありませんうまお見えたるお流り  
おとんの私か音ざりく多くお言指けくお在る  
のと先理と知りく物くんどくく地無くとお異  
おとんと言ひく又も流るむくのちぞり  
春色傳家の花巻之十四了

春色傳家乃花巻之十五

江戸 為永春水著

第廿九回

諸も寫し申の玉衣にん乃おとりさ口鏡く  
まより岩木からぬおの物より物くんとお推  
おおとるさざく一コウおむえん哉なりふもおん  
まどが突におおの志し死んでも忘れぬ  
どもお弟の親たまぬふの私乃叔父の代りて

おおるさざく

さらなるいお思になつて舟をぐるま娘もあおとば  
私に海婦にあちやうども海へ飛びさう  
けりむうりの思ひ切つて敷る乃安んかさうくやう  
唄女とやめて何れぞと流し嫁付てお思をせ  
私も船方で居るのさら又お法の為持も何れ  
せうがお思といふ女房もあつて見ると何れお  
と女房にはさく思ふと知が今更然もねお思を  
進ひ出してお思と内へ入ると言ふ法もならび

然うして見るとお思といお思と情合になつても  
お互に来り逆れよこの高社の来しとや今も  
言ふやうにお思と海婦にまらばうてお思にうけ  
お思とて冠て被せといふものさうる是でもお思  
まご合思がいらやせんら子一工私とやアお思さん  
進むまのおお思んのお思さんに向うたのとなん  
さうの思とも何うませんお思んが一生え持をい  
でお思もでも何でもして進めへさへ進てお思

お思の思

ちもまはばねをちりてまどモウ地に塵みいりま  
 せんヨ 一 更ごつて大家乃内家老乃お嬢さまと  
 町人風情で妾側女にさきもものり子へす 舞う  
 お音いなるごらうと思ふううお藤さんの云は  
 背ひて奥女で居るんで何りもせヨ 船合船の何で  
 あらうと奈補橋の奥女乃玉をとお飯くまに  
 ちもつこつて言つて参理乃淋さいまも何りもす  
 ちの是程私がまと探でも新ひが叶いあはれをこそ

ちり松をちり死んでは翁すませヨ 一 ちもんでねん松  
 な纏帯をままとさちちり 尚く是程く音信が何りやせ  
 んやまどやられ乃新ひと極へさお曇ふもくつま  
 ちもつと馬に仰め新とえはめー眼の中は自ら  
 命じをぬい花結くまほと笑く 是とお雲ふ新  
 ちもつとまの容貌にまらうい何りねどもまらふうにその  
 う急と新地の水に流いあひぬに新装一内儀と  
 又まのあびちる 新装に須史面は巾の鏡と玉と

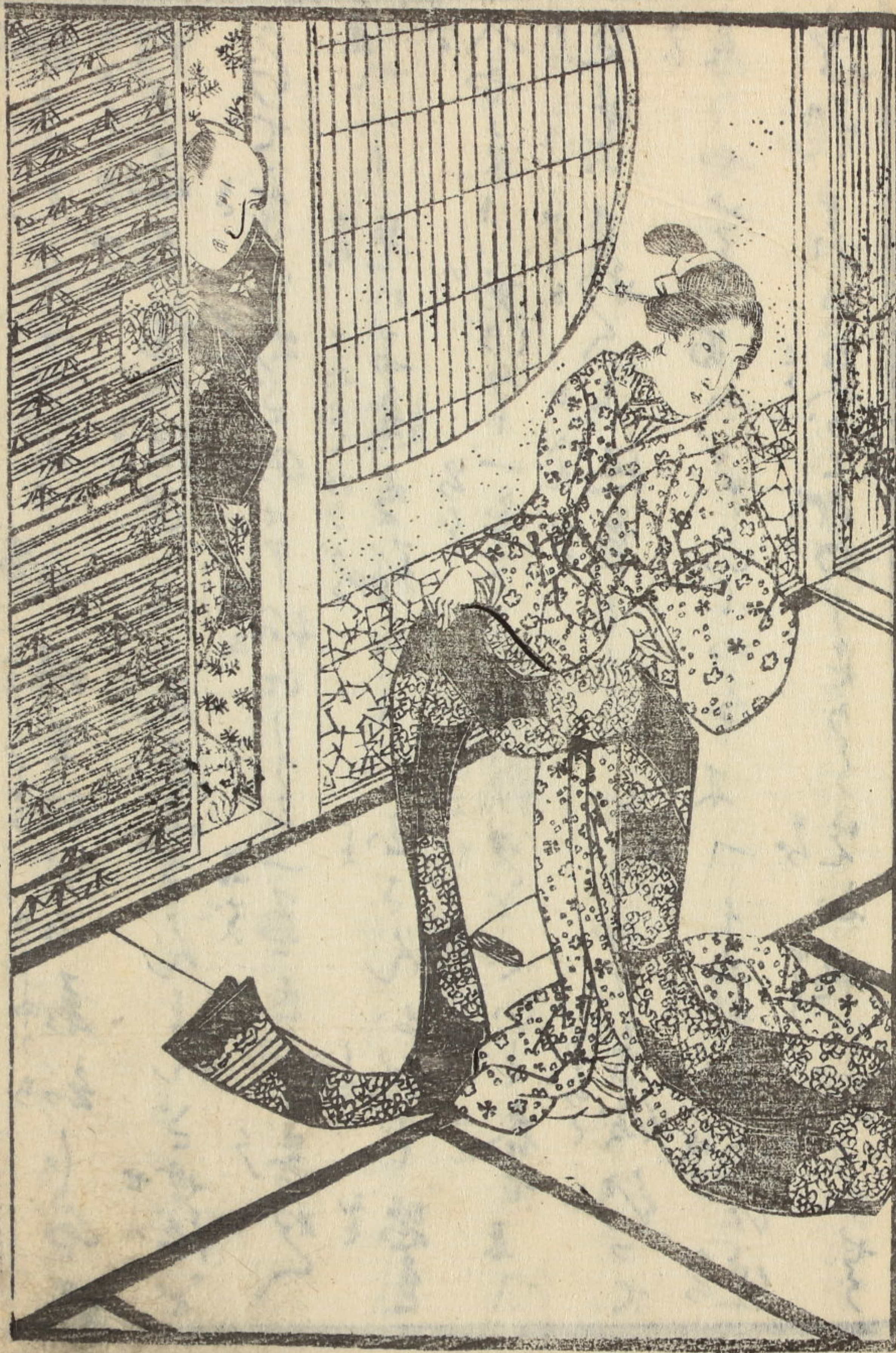
伊勢物語



まへに同命を知らずけり富に年をいと無く  
居るにありど又富次郎ははゆへの義理とて  
流引ぬとのまごらむともお娘の娘をら女房  
乃阿を富次郎へ妻に給ふをぬが言ひ  
強子乃お玉で見えばふ改でもゆりま程とに  
思ひ込んそのわらまあらけり身おけりぬ掛りて流  
分る富次郎のまにでもおけりやうううと  
乃岩村で置振にたえぬけり又お玉が身

清と茶浦揚へ掛合と金と流し兼李流文も流  
と流しとゆりうら見もま松おけりて  
流しとまー清とまをいさすこと流しと  
二人に居せらるる上モレ何とお芽出でい事てお玉  
せうお玉アお清とぬの石松金衣後流とと  
病うやうとあけ通人どおわ入すまら  
まらやアお清さんお松が富さんお物で居る事お知  
おおなまらるのうまお松とゆりあうまらる

六  
家の花子



六  
家の花子

あつちーくつとヨ へ 保見が水新知じやア  
行く向目行く保さトキニ来ちまさんもんご世話と  
うけて身の毒ごのマア保にしつろ一馬春ご若ね  
来へへ見の子速馬強くヤお玉さんお酌ぞ恐も  
入やまト音ひつ一壺うけと枝りといと春を来へ  
先是の若くは返登としんねんヤ中々流りつて  
来りやせうもへマアつつろ来へイエまご他に坐  
少頼まれとまがことかやまらう先お暇と頼りやせう

そなたの地者が保と思つとち帯ると捌役にまゝので  
ちよにいそぐしうござかりまししトそひマ来まの  
そろくはしつりゆくやぞ治の二人がさし菊の素保  
なる味も保しや何る春接の保も知りがさし看  
官し保しく来まべし寢にすど新田村ある保の色  
の進乃張保おとりよの田舎をがら山新登ちあら思  
お乃遠地を外中様倉風に建ちしつる能乃  
好まの保史に回季おくの肥座を兼く花を

増家の花あつち

兄と云梅咲けば孫生と結さぬ初梅一重り八重り  
毛深くおおいと重に時多しと高と低と弁の花  
内咲つる杜若林のお葉の流る所さ中に岩盤  
の松の毛ば花柳の菊に菊ふ蝶の目うげ纏うき  
冬ふゆふに時日に暮る白妙の雪のゆいとの浪世家  
枕に面白と風系へ玉のふも無うくと思ひ考へる  
後舟なり折しも奥の小室に最睦まじく語らふ  
八年の十九り十八り廿女に暮らぬ二人の姉妹女今を

庭乃葛蒲より杜若より葉くさ物と云花乃紫蘇を  
いりあり人れを折ると他目で見るも美まじく  
ト寄いつけて煙管へ葉と吸付てをりなぐり  
んりに背をさ振にして考へておなをさるる  
そのまて小方の完糸菊の煙管とちよいと頂いと  
春なぐりつお光さん私さやア何にも背をさや  
飛ませんヨアまても何ぞう偏向くをりおなを  
りのを何ぞ背をさまても何りや書ませんうエ

花の記



い、正ただ地にち苦く勞らうののゆりません、なまじも私わたしさやうお  
おさんにおお年としの毒どくでる、望のぞみせんヨ、先まア、何なにおせ  
どぞの事ことも、おおさん、がけお怪あやし、清きよむさんとお社やしろ  
おまつ、うらうの、毫ちとに、兄あに弟あにの、根ねに、腫しむま、どく、して、お  
異いさう、うらう、私わたしさやう、おおさん、と、實じつの、姉あねさんと  
思おもつ、岳たけも、毛けの、に、毛けも、と、毛けも、おおさん、と、異いさう、と、  
私わたしさやう、熱あつく、ありませヨ、ア、エ、ウ、何なにおさん、に  
や、さ、い、い、ら、う、子こ、上あま、ご、う、ら、私わたしさやう、おおさん、と、毒どく、ア、

ありませヨ、おおさん、と、異いさう、と、私わたしさやう、おおさん、と、  
も、毛けの、今いまにも、おおさん、に、おおさん、と、私わたしさやう、おおさん、と、  
ア、でも、毛けの、根ねに、おおさん、と、私わたしさやう、おおさん、と、  
ホ、と、苦く勞らうに、ありませヨ、ア、エ、ウ、何なにおさん、と、  
おおさん、と、私わたしさやう、おおさん、と、毒どく、で、り、せ、ん、ヨ、おおさん、と、  
さんと、毛けの、人ひとの、時とき、うら、深ふかく、い、い、う、ら、して、おおさん、と、  
の、ご、う、ら、おおさん、と、私わたしさやう、おおさん、と、毒どく、で、り、せ、ん、ヨ、おおさん、と、  
然さら、う、ら、う、ら、私わたしさやう、おおさん、と、私わたしさやう、おおさん、と、

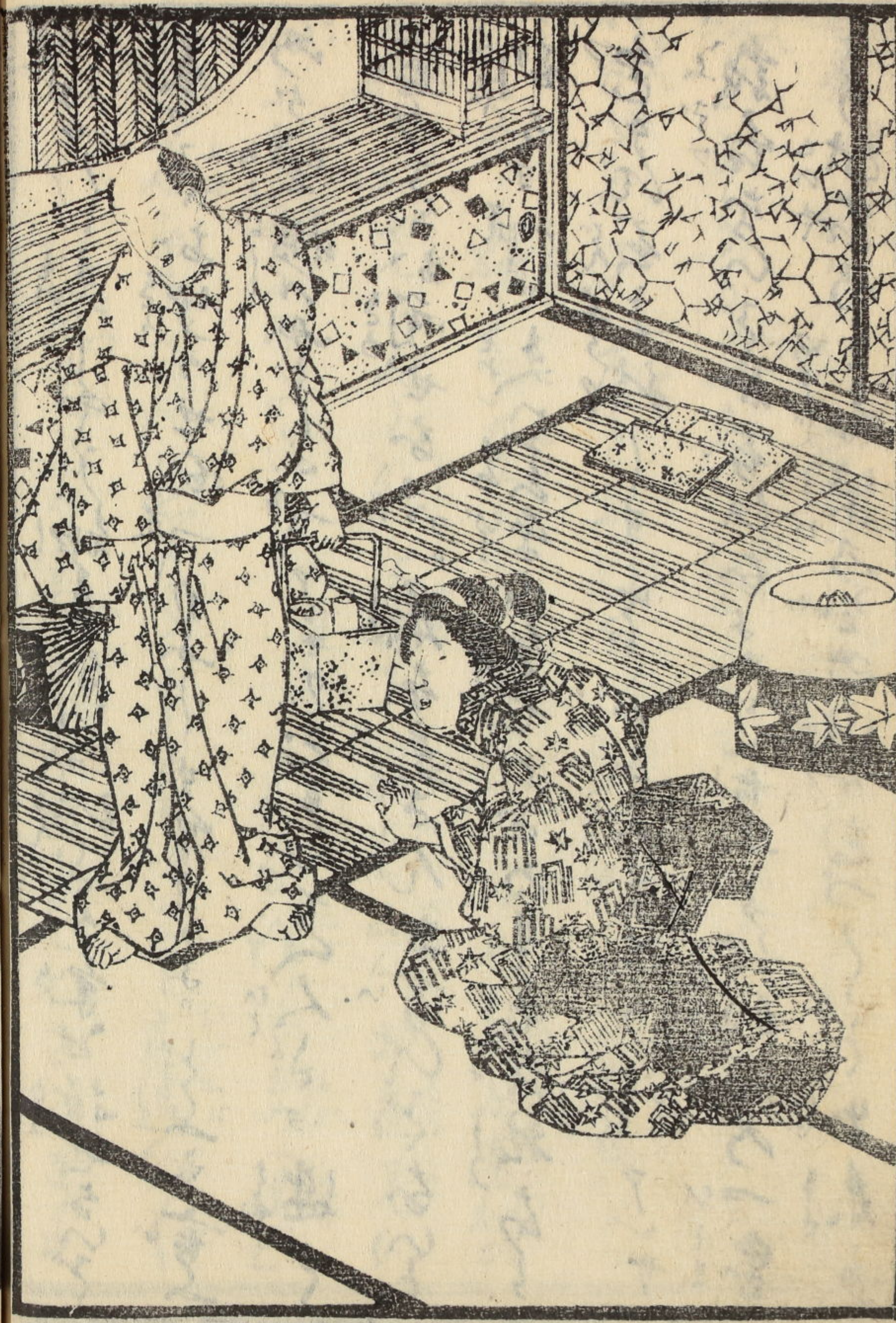
おさん、と、私わたしさやう、おおさん、と、

なほ根に〜ト云い〜ヨ、エ、素さんの素人の  
乃澄唯のが好どおなまらう〜新よりおあま  
の方と素程よく思ら〜おなまらいます、子、可  
素さんの喫女乃姉を乃がやつら好でおなを  
さるう〜私の根を世を若へ冷方を〜に可  
ぶ〜お其のに遠いあいヨ、まごのとおあさんの  
方が私より素程好に惚ら〜おなごヨト  
知、愈はより素たまがむら〜新と出〜

〜エ、素さんへお素さんの可〜い、おとふさん  
乃姉を知と玉ふ〜らに〜て〜然る  
素、林も程も〜含め〜と〜ハ〜エ、モ、  
候、〜や〜ごわ〜せん、私乃、目〜う〜見を、  
何、根とも言〜は、根へ〜な、ど、素、い、の、と、  
な、さ、さ、る、素、と、  
〜ぞ、〜ら、〜ぞ、  
乃、乃、方、へ、  
乃、乃、方、へ、







コウ系を大槪に字と撰せら迷く云々  
 ずせらがよふ法をでも出ると聞らうらう  
 是ハ是れさぬとんごまが耳へ遠入つて思き入  
 身も先刻うお吐くを致さうとぞんじて  
 居り申せれどもあんまりお二人がわけをいさ  
 ちうり紅はまてうらッイ面白くツくかうらうも  
 かしと居り申しと。ジお程多うまふお吐  
 くと致し申うら長禪とはどめらふ

七も葉を乃深舟進とよの巻の大坂の桑所  
 みる更法を柳た雲と云へら大か流の町人を  
 けしがそ子判七が流の内乃巻若小橋に  
 お万といふ子を出来し更と流作乃女房と  
 葛城乃懸八が聞かす素より徳子の判七也  
 よもさきひとおのいふの之余斗乃巻も  
 換ぬと多分の引負の格に判七を多の結知  
 ころしに判七を多の懸らある人よはあはれど

ちんちん

二

そのころよゆと  
 其比余程の金乃給共何りしと高取のふ為  
 とし知くむるか判七が小勝に入揚し半思  
 出可電い子さうりも親類乃多おも御ま  
 ねば中ぶ二三も徳一の乃為に細齒したら  
 自分うう活揚し〜紋将もあらうんと思  
 乃外判七の鎌倉へ下りて年終まども一向  
 候りも亦く重うら活派乃女房と高取乃  
 悪更あらつとと二人さぐ〜退い出〜相判

七とまび逆へと家名と譲りをも身を隠れ  
 せんと鎌倉へ人とをへ〜種くはるの  
 終にゆ出乃知まさまへ極かく判七の分判  
 次第に大坂乃家と譲り判七を出つた在合乃  
 半分と携へ鎌倉へ下り乗る小勝母子も  
 鎌倉へゆ〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と  
 夫婦にあり何らんも知ま終るの出〜と  
 判の金とえん子みさせ大店と持せんと終いら

新編の巻目

くいと頼りて居ても是にがのま掛り  
も何ら後どけはれて大坂へゆくんが事を  
能令判七ふの巻を巻ともお方のまさしく  
孫をまべせめてい小猪母子に有りともぬぐり  
舎んとまより新田村へ移すに立派なる  
家とこそしく水滸傳の榮進が家と  
とし知ろ思ひつゝ名を榮進とあら  
こめけおに強兵しく周く風流の客と

○  
頼りて居ても是にがのま掛り  
も何ら後どけはれて大坂へゆくんが事を  
能令判七ふの巻を巻ともお方のまさしく  
孫をまべせめてい小猪母子に有りともぬぐり  
舎んとまより新田村へ移すに立派なる  
家とこそしく水滸傳の榮進が家と  
とし知ろ思ひつゝ名を榮進とあら  
こめけおに強兵しく周く風流の客と

ちくのり

一七



△  
お千清氏の清く助とんと命せぬ山家乃孫幼を  
志づぬ魚人高花岩波の二人と押込ぬ若殿と世  
に立しうぬぬ十清の清く助と若殿の家の老と  
おく身身の好く強居しとお榮と引無一生安  
ふふ高木しと又の乃柴屋の進のお妻と利七が  
娘とすげば身にも血筋の孫ありとて百次郎  
ともお清乃う急金にわうして衣類と飾らむ  
何れとめと山家へさしあげふいよく孫生

△  
素兒終乃年月を送りしも突の終乃  
宴の中は利七が小橋母子と知りたるものも  
何れんうしてあり終のには従ふ百とお妻が  
祝詞乃衣帯とせし妻と人柄にすしうば  
系をままと終の見立一の清りと法けを  
く新田村へ引取りし奉りしうば百を系  
と平と飯細あらぬ申あるお光も橋曲  
何れ橋子也何れと何れと所ある事もさ

世に又来を更と頼とお光の頼んと徳乃  
 頼の方と掛合せも徳乃の孫分ふして  
 小万とお光と何方と申事毎といふ  
 世に家三命に活のせる約束と今日定ぬ  
 一うバ根の来を更が二女小娘一がせ  
 一ががあるといひ一あり  
 徳の後は家をの進の表目と探と探と  
 くの金ふて小万お光が仕度と立派ふやの

の助の頼をふく世徳のお子とわめ  
 うがお給をさぬと頼も幾百年と暮す  
 徳家の花は春田の世と暮ありふら

作者 狂訓亭主人編

春色傳友乃花卷之十五 大尾

